

はじめに

アリストテレスは「時間は運動の何なのか」と問いを立てて、時間は「運動の数である」という量的時間を定義した。本発表では、「時間様相は運動の何なのか」という問いを立ててみたい。そして、時間様相に関わる運動として、人間の「心の働き」を考えるが、この「心の働き」を可能な限り自然主義的に捉えてみたい。というのも、アリストテレスが量的時間を「自然学的」に定義したのにならって、時間様相をもなるべく「自然学的」に捉えたいからである。そのために、現代アメリカの自然主義哲学者ルース・ミリカンの諸説を検討しながら、そこから時間に関わる契機を取り出してみる。

1 ミリカンの自然記号論 —— 自然のそのものの中で「表象」が生まれる

ミリカンは、バクテリアから人間の意識に至る進化の過程を「表象」という観点から連続的に捉えるという雄大な構想を提出している。そのポイントは一種の自然記号論にあり、自然の中には因果関係が働くだけと思われがちだが、ミリカンは、原始的生物といえども複雑な「表象(表現)活動」をしていると考える。「局地的反復的自然記号」といわれるように、自然の中に規則的に反復するものがあれば、それは一定の条件のもとで「AがBを表象する」という意味作用になりうる。

2 時間と空間の分離 —— 複数のアフォーダンスによる時間順序と、線形時間

人間以外の生物は環境アフォーダンス空間と言われるような、事実の認知と行動の指令が一体となった世界を生きている。このようなアフォーダンス空間では、まだ時間は自立することなく、空間と融合している。しかしその中で、より進化した動物は、複数のアフォーダンスを経る複雑な行動を行い、そこに時間順序の表象が生じる。目的が達成された状態を表象するという事は、現実の知覚の外部に出ることであり、かなり高度な表象作用である。そのような進化の延長上に、人間の持つ線形時間の表象がある。

3 空間の外部にある線形時間

人間の言語は表象を「否定変形」という特異な機能を持つ。つまり、否定辞を付加する否定判断によって、現実の知覚世界の外部に広がる広範な可能的世界へ、我々の視点を解放する。このようにして環境アフォーダンス空間の外部に出ることによって、空間とは次元の異なる線形時間の表象が生まれる。

4 人間に固有の時間様相

原始的な自然記号の特徴は、知覚＝記号とそれに向き合う私自身が「時空の中に嵌め込まれている」ことにある。しかし、絵や写真は、私の生きる「今、ここ」の時空に嵌め込まれていない「記号の記号」である。想起や予期もまた、その延長上で「記号の記号」として捉えられる。とはいえ、想起と予期には非対称性があり、そこでは、線形時間とその要素である「日付」「時点」が「見かけ上自立している」。この、「日付」や「時点」の「見かけ上の自立」こそ、時間の大きい秘密なのである。